
色えんぴつ

朝平 夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色えんぴつ

【Nコード】

N3863A

【作者名】

朝平 夜

【あらすじ】

流行りや周りの目に流されず、常にマイペースな5人組。…新垣^{ニイガキ}桃は、その仲間である中西裕也^{モモ ナカニシユウヤ}が好き。なのに、裕也との別れは、突然訪れた。

プロローグ

「聞いた？青組のあつやくんとりつちゃん、ケツコンのヤクソクしたんだって」

「へー、すごおい」

「……………」

ノストラダムスの大予言を十数年後に控えた、ある日ある幼稚園にて。小さな男の子女の子が5人、木の下ベンチに座っていた。足をブラブラさせながら、彼らは大して弾まない会話を彼らなりに楽しんでいた。

「バカみてーじゃん。ジンサーセツケーもろくにできてないうちから。むせきにん」

「えー、モモはいいとおもうな。ロマンチックだもん。あこがれちゃう」

「モモはコドモねー。こういうヤクソクって、おっきくなったらアシカセってゆーの？ジャマなだけじゃん」

「……………」

男の子のうちの1人…一番小さな男の子が、

「そうかな？」

というように首を傾げる。

「そうよ」

と溜め息混じりに言うのは、つり目気味な女の子。そんなことないのに、と頬を膨らませるのは、髪に緩いウェーブのかかった女の子。

「だいいちさ、ガキのころのヤクソクなんて、わすれちゃうよ」

伸びをしながら、短髪の男の子が言う。ウェーブの女の子は、うーっと膨れっ面のまま。

「そんなのヘンだよ、ヘン！」

「モモガキだなー」

「ガキだよ、まだ5さいだもんっ」

尤もな返答。すると、今まで口を開かなかった男の子が、ふにゃつと笑った。

「カコはカコ、イマはイマ、ミライはミライじゃん。ぼくらはぼくらだし、ね？じんせーイロイロ」

「はア？なにいてーの？」

苦笑混じりに短髪の男の子。確かに、彼の言葉は言いたいことが沢山あるのかぐしゃぐしゃで、いまいち伝わらない。

「つまーり！」

びし、と大きく青い空を、男の子の小さな人差し指が見据えるように指す。

「ぼくは、ぼくらがずーっとトモダチでいられたら、それでいいのですっ」

「あはは、わけわかんない」

クスクスとつり目の女の子が笑った。それを満足げに見てから、男の子はウェーブの女の子の方を向き直った。女の子は目を丸くする。

「それにねー」

ああ、なんて眩しいんだろう。女の子は思った。自分を真っ直ぐ見つめてくる男の子が、太陽に見える。笑顔を見ると、目がチカチカして、心もきゅうつとなる。寒い日に、家からいきなり外に出た直後に胸が苦しくなる。あんな感じ。

「ぼく、モモのみかただから、モモいじめちゃダメーなの」

ねー、と男の子が笑う。ウェーブの女の子の頬が、ぱあつと桃色に染まる。恥ずかしくて、嬉しくて、なのに苦しくて…。女の子は、そのよくわからないモノの存在に気付かれないように、そおつとはにかんだ。

数年後、女の子……新垣桃は気付く。

それは、甘酸っぱくて、チクチクする不思議なそれは、
「恋」

なのだと。

彼らの日常

「きいた？C組の大野と青山サン、付き合ってるんだって」

クラスに響く、高い声。すると、教室に居た男子たちが、どやどやと騒ぎ出す。

「マジで？」

「俺青山サン狙ってたのにーッ」

「アホくさ」

ふう、と溜め息をつきながら、音楽雑誌をパラパラと捲る。短髪を金に染め、見るからに生意気で素行の悪そうな少年トウドウノフタ：藤堂信太の呆れたような発言に、つり目気味の、ストレートの黒髪が美しい少女：秋月まひる（アキツキマヒル）が頷いた。

「よくもまああれだけ騒げるわよね。才能かしら、あれ」

まひるもまた、呆れを顔中で表しながら雑誌に目をやる。すると、ウェーブの髪ニイガキモモの、童顔な女の子：新垣桃ニイガキモモが、いちごミルクを飲むのを止めて2人を見た。

「えー、私はいいと思うな。ウワサによると、大野クン、小学生の頃から青山サンのこと好きだったらしいし…いいよね、ロマンチックで」

両手を組み、うつとりと頬を染める。信太とまひるは、互いに顔を見合わせると、再び雑誌に目を戻した。

「あ、このグループ解散するんだって」

「ちよっと、ノブ、まひる！聞いているの？」

「聞き飽きたっつーの。モモはいーつつも」

「ロマンチックだよねー」

とかしか言わねえじゃん」

「ぶう、2人共意地悪ーっ」

唇を尖らせて拗ねる桃。すると、長身でがっちりとした体躯の男：

板野攻次が、慰めるようにくしゃりと桃の髪を撫でた。大きな掌の感触に、桃は目を細める。

「ありがとう、コーちゃん。…コーちゃんだけだよ、私の味方は」

「甘やかすなよ、攻次」

「そうよ、コーちゃんはモモに甘すぎ」

「……」

無口な攻次は、反論するでもなく眉を寄せる。彼がその仕草をするときは、大体

「ケンカしないで」

などの類のサイン。この場合明らかに喧嘩ではないのだが。

「昔からコーちゃんはモモには特別優しいんだから。…まあ、コーちゃんは誰にでも優しいけど」

「昔からと言えば、モモはいつまで経ってもガキっつーか、夢見がちっつーか」

「いーでしょー！それを言うなら2人だって、クールすぎだよっ」
皆が互いに、昔を口にする。

彼らは、幼い頃からの親友同士なのだ。

そう、幼稚園の頃からの。

男とか女とかカンケーない、これが彼らのモットー。べたべた同性の友達と付き合うよりずっと楽よ、とまひる。居心地良いしな、と信太。クールで感情の起伏が目立たないと思われがちな2人だが、本当はとても優しく、一緒にいて楽しいことを桃は知っている。そして攻次は、その何倍も優しいことも。

新垣桃は、髪にウェーブのかかった少女だ。所謂天然パーマで、色素は薄め。比較的可愛らしく女の子らしい顔立ち。彼女の何よりの特徴は、夢見がちなことだった。それは幼稚園児の頃から変わらず、恋に恋するような性格。恋愛小説は桃の必需品だ。将来の夢は、絵本作家。決して大人っぽいとは言えない、そんな少女。

秋月まひるは、つり目気味な少女だ。その髪はストレートで、日本女性らしい美しい黒髪は、彼女のスツとシャープな顔立ちをより美しく見せている。可愛いというよりは美人なタイプで、桃にとって
は親友であり姉のような存在であった。クールで冷静沈着。しかし
友達思いな、まさに姉のような、そんな少女。

藤堂信太は、短髪を金に染めている少年だ。目もキリツとしており、
鼻筋も通った美形の類に入る外見。耳朵には小さなシルバーのピア
ス。喋り方も、お世辞にも良いとは言えないが、彼らの中で最も頭
が良いのは彼だった。冷たく、何事にも無関心だと思われがちだが、
いつも皆を気にかけている、まさに兄のような、そんな少年。

板野攻次は、とても長身で、がっちりとした体躯の男だ。少年とは
もはや呼べないほどで、少し顎髭も生えている。手を加えていない
黒の短髪に、小さめの瞳。例えるならば大型犬。無口で滅多に喋ら
ず、しかし大らかで誰よりも優しい。争い事を好まず、実に穏やか
一緒にいて安心できる、そんな男。

そしてもう1人。大きな瞳に、笑うと見える八重歯が特徴の少年が
いる。制服は着崩し気味。背は高い方ではなく、本人曰くまだまだ
これから。非常に子供っぽく、趣味はアニメもしくは特撮ヒーロー
ものの番組を見ること。明るく、まさに子犬のような少年。クラス
でも人気者な、彼の、名前は…。

「ノブーっ！ちよっ、見て！購買幻のパン・抹茶クリームパンっ！
！遂にゲートト！」

「るせエよ、裕也」

「何よパン1つで…大袈裟ね」

「おーげさちげーよ！幻なんだぞ、すげーんだぞ、な、モモ？」
ナカニシユウヤ

中西裕也。桃たちの大切な親友の1人であり、…桃の、幼稚園時代
からの想い人。太陽みたいだと思い続けてきた笑顔は今も変わらず

輝いている。まぶしい、と時々目を細めそうになる。

その瞳が、同意を求めて桃を見つめている。桃、だけを……。

くすぐつたい。そう思いながら、こくと頷いてやる。口元を綻ばせて。すると裕也は、満足げに桃に笑みを浮かべる。

「ほらなー、モモはちゃんとわかってんだよ」「バーカ。わかってあげてるんだよモモは」

信太が裕也を小突く。裕也は、うーと唸りながら攻次を見やる。

「コーちゃんも食いてーよな？」

「……」

こくと頷く攻次。その目は、雨の日の公園に捨てられている犬のよう。攻次は、身体は大きい、中身は無邪気で可愛い。弟のようだ、と4人は常々思う。幼稚園の頃、5人のうち一番小さかったのは彼で、裕也は彼の兄を気取っていた。

「おっけー、じゃあモモとコーちゃんにはおスソ分け」

「ありがと、裕也」

まさに雀の涙ほどの抹茶クリームパンを受け取り微笑む。桃はあまり抹茶が好きでない。だが、裕也がくれるものなら何だって嬉しいのだ。

「あげるならもつとあげなさいよ」

呆れた口調でまひる。

「やーだよ、俺の分減るじゃん」

「…意地汚え…」

「はあ！？ テメツ、これは幻の抹茶クリー…」

「まあまあまあ、私さっきチョコいっぱい食べてお腹いっぱいだし、ね」

「ほれ見ろー」

4人のやりとりを見て、攻次が笑みを浮かべる。

クールなまひるが居て、女の子らしい桃が居て、オトナな信太が居て、大らかな攻次が居て、子供っぽい裕也が居て。

それが彼らの

「日常」
だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3863a/>

色えんぴつ

2010年10月11日11時53分発行